

# 米国は2000年に国家計画

「ナノ」は、10のマイナス9乗（10億分の1）のけたを表す。地球を例にとると、地球の直径は約1万4000キロメートルなので、その1ナノといえば、わずか約14ミクロンと1円玉より一回り小さな大きさになる。

一方、「フェムト」は10のマイナス15乗（1000兆分の1）のけただ。1秒の間に地球を7周半進む光でも、1フェムト秒だと0.3ピコ（1ピコは100万分の1）しか進めない計算になる。

1980年代以降、計測技術や加工

技術が飛躍的に発展。これら微細なレベルの単位にまで踏み込んだナノテクノロジーが技術革新の原動力として世界的にクローズアップされるようになった。

米国は2000年（平成12年）1月に「国家ナノテクノロジー計画」を策定して、2001年度のナノテク関連連邦予算を前年度比83%増と大幅にアップ。

新エネルギー・産業技術総合開発機構の調べによると、2002年度同29.6%増、2003年度（要求額）

同17.5%増とその後も拡大し続けている。

一方、日本は第2期科学技術基本計画で「ナノテクノロジー・材料」を重点4分野の一つとして明示。総合科学技術会議が13年9月に策定した「分野別推進戦略」で①次世代情報通信システム用ナノデバイス・材料②環境保全・エネルギー利用高度化材料③ナノバイオロジーなど5項目の重点領域を定め、それぞれの研究開発目標を掲げている。